

「温泉の保護と利用に関する懇談会」報告要旨  
温泉地域研究の立場から

山村順次（千葉大学）

1 高度経済成長期以後の温泉開発と温泉利用の変化

高度経済成長最盛期の 1973 年の主な温泉地の地域的特性を見ると、歓楽性の強い温泉地は箱根・伊豆・北関東・北陸・近畿・山陰・北九州地方などに多く、東北・北海道・上信・中九州地方などは歓楽性の弱い保養温泉地で特色づけられていた。

1972 年～2002 年の 30 年間における温泉開発と温泉利用の変化を見ると、宿泊施設のある温泉地数（増加率 68%）・源泉数（67%）・温泉湧出量（104%）・宿泊施設収容定員（60%）・温泉公衆浴場（268%）は高い増加率を示したが、宿泊施設数（20%）・延宿泊客数（25%）の増加率は高くはなかった。大深度掘削の導入による温泉開発地域の拡大、「ふるさと創生 1 億円事業」による日帰り温泉施設の急増など、この間の温泉開発形態の変化や社会経済的要因によって宿泊稼働率は 35% から 27% へと低下しており、このことは既存の観光温泉地の停滞を物語っている。温泉開発が進んだ結果、温泉湧出量の自噴率は 49% から 31% へ、42 以上の高温源泉率も 64% から 53% へと減少し、さらに、源泉中未利用源泉の比率が 20% から 32% へと増加していることは、温泉資源保護の上から問題であろう。

温泉開発と温泉利用の地域的变化を見ると、温泉湧出量は特に東北・中九州で顕著な増加を示し、日帰り温泉施設も温泉資源に富む北海道・東北・北関東・信越・九州地方や静岡県で増加が著しい。温泉が少ないといわれていた千葉県でも温泉開発が活発化し、宿泊客数・日帰り客数ともに急増している。延宿泊客数では永く首位の座にあった静岡県が 1995 年に北海道に抜かれ、現在では 30 年前と比べて全国比を 15% から 8% へと減じ、一方北海道は 8% から 10% へと増加した。

温泉利用の適正規模を知る目安として、収容定員あたり温泉湧出量（温泉資源性）を算出すると、おおむね東北・北海道・九州地方などでその値が高い。また、近年の温泉開発で日帰り温泉施設が多くなった大都市圏でも高い値を示すこともあるが、その性格は異なる。温泉資源に乏しかった地方では、温泉資源性は一般に低い。

2 温泉旅行の実態と志向性の変化

国民の温泉旅行希望は、昔も今も変わることはなく大きいですが、旅行形態は団体から家族連れ・友人連れに変化し、志向性も多様化してきた。近年、観光から保養への志向性が強まりつつあり、温泉地選定の際の理由も男女・年齢に関係なく「温泉資源」「温泉情緒」「自然環境」が 3 大理由となっている。したがって、温泉地に望む施設も露

天風呂をはじめ、散歩道・低料金の宿・郷土館・郷土料理店・外湯・和風の町並みなど、温泉地を特色づける施設や保全された地域環境を求めている。しかし、真に客が満足できる温泉地は多くはないのが現状である。

また、温泉と癒しの観点から見ると、多くは年齢に関係なくやすらぎを求めており、また 20 代から 40 代の働き盛りの人々が、温泉にストレス解消を期待しているのである。静かな環境と源泉かけ流しの温泉がある湯治場は、まさにこうした健康志向型保養温泉地として最適であるが、その数は減少しつつあり、利用客も高齢化が進んでいて客の減少傾向が見られ、温泉地の経営上問題である。中には現代の湯治場として機能している温泉地もあり、実際に湯治効果があるとの比率も高いが、このような温泉地は数少なくなっている。

### 3 持続可能な温泉地域づくりへ向けて

日本の温泉資源を保護しつつ適正に利用して、国民の健康・福祉に役立てるために、全国に数多く指定されている環境省の国民保養温泉地が、今後ともいっそうの役割を果たす必要がある。特に、指定条件のひとつにある温泉顧問医の常駐については、早急にその整備を図ることが望まれる。特に温泉資源性に富む東北・上信・九州地方を保養温泉地域として特化させることである。

温泉地で適正な価格で数泊の滞在ができるような保養システムを立ち上げ、広く国民に正確な情報を提供する保養温泉地情報センターを設置する。同時に、温泉地においては景観の乱れが一般化している地域環境を保全するとともに、地元民が地域の自然・歴史・文化などを実地にガイドして滞在客との交流を図り、地域をあげて客が満足し心身ともにリラックスできるような温泉地域を形成する。

温泉法に基づいた温泉の質と量を厳正に再チェックし、温泉施設の浴槽での温泉利用について正しい情報を提示することが望まれる。日本温泉協会の天然温泉表示は、情報公開の上から大きな意義が認められるが、加水による温度低減や浴槽の温度調節のための循環装置などについては、正当な評価をする必要がある。

温泉旅館の大規模競争の時代は終わったといえよう。各温泉施設では、貴重な温泉資源を正しく利用している実情や温泉の入浴法を利用客によく知らせる必要がある。日本には、古代から温泉を禊に使った歴史がある。入浴の際に「かけ湯」をし、温泉に感謝して入浴してほしいものである。